



## 『カモノハシの博物誌ーふしぎな哺乳類の進化と発見の物語』

浅原正和 著

2020年7月  
技術評論社 発行

224 頁

定価（本体 2,280 円＋税）

松倉未侑・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学類）

「商売柄」、動物好き学生から相談を受けることは常態。中にはチンパンジー、トラ、キリンなどピンポイント指定をする者もいて鼻白ませた。もし、職につなげたいならば、広い視野を具有した方が無難とアドバイスするのが精々。だが、卒後、前述の方々はそれぞれ園館獣医師（学芸員兼）や地方自治体救護獣医師（環境教育担当兼）となったので結果オーライ。

さて、本書著者のカモノハシ好きも折り紙付き。彼が京都大学大学院生時代、指導教官と一緒にチベット調査（浅川ら、2009）に参加。その際、浅川はその愛を聞かせて頂いた。そして、10年以上の時を経、それを生業の種とし、この上梓に繋げた。異国奥地で語られたカモノハシ愛にちょっと食傷気味であったことを反省しつつ拝読。ただ、浅川一人で読むのは惜しいので、将来、エキゾ・鳥類の臨床を目指す新人ゼミ生（松倉）にも読み込んでもらった。この学生がカモノハシを診ないとも限らないから。もちろん、このようなことは、一切、伝えていないので、以下は彼女の純粋な反応となる。 （文責 浅川）

本書では、単孔類カモノハシについて、形態から生態、進化、そして研究の歴史から人間との関りまで幅広い内容を扱っていた（7つの章で構成）。関連論文や現在進行中の実験などを文献表も完備しているので、この動物に関する適切な論文検索の手間は省けよう。まず、何と言っても、カモノハシは一般獣類のイメージからかけ離れた形態を呈すが、イヌや（同じ水棲の）イルカ・ラッコなどの形態と比較し、生息環境への適応などと結び付け解説され、特異性の性質が腑に落ちた。また、オスには有毒な蹴爪による繁殖時の闘争や（視覚・聴覚・嗅覚などではなく）電気感覚で餌動物を捕獲することなど、純粋に驚かされた。

生態に関しては卵・ミルクの特質、繁殖・育児活動、人工繁殖例などが詳述され、もし、自分（松倉）が飼育することになったら参考になることだろう。進化に関して、これら授乳様式や胎盤などの側面からあらためて平易に解説され、刺激になった。進

化と言えば、化石研究で単孔類全般の古生物学的な知見を披歴しつつも、今日まで生き延びた秘訣について、著者自身の考えが示されて、かつ、この教訓が人間も学ぶべきという示唆を、本書読者へのメッセージとして発信したのだろう。

第5章では、著者がどのような経緯でカモノハシに出会い、研究したのかの経緯が記された。この章では著者の好奇心や情熱などが読み取れ、研究に邁進する人の考え方や発想にも触れることができ、自分（松倉）の生き方にも取り入れたいと思う点が多々あった。また、研究者の厳しい現実も赤裸々に書かれ、日本の研究に対する姿勢の問題も読み取ることができた。最終章では毛皮目的の乱獲から保護の歴史だけでなく、種の保全でも問題視される地理的変異個体群の認識についても解説されていた。加えて、カモノハシの特異的な疾病や自然生態系を蝕む外来種問題、淡水域の漁業における混獲など、今日まで連綿と続く日常生活とも関連付けて考察されており、世代や国を超え多くの人々に知って欲しいと感じた。

(文責 松倉)

第5章には（特に後半）、章の題名からは馴染まないかもしれないが、冒頭のピンポイント・ラバー（浅川の造語）が、どのようにして想いを遂げることができるのかのヒントが示されていた。思い当たる方は今日から実践しよう。もちろん、本書を読み込んだゼミ生（松倉）にも伝わっているようなので、課題として与えた指導教員としては安堵している。

疾病については家畜からのレプトスピラ症、両生類からのムコール真菌症、マダニ類からのバベシア/タイレリア症（本書では「赤血球に寄生する原虫」）が紹介され（p. 199～201）、感染症分野の野生動物医学的示唆も得られた。しかし、他の箇所も同じだが、引用個所に文献明示が無い。せっかく、参考文献一覧が完備されているのに（p. 222～223）、実に勿体ない。おそらく、一般書には馴染まないとの配慮であろうが、本書の資料性を高めるためにも、改訂版では引用文明示方式を検討して欲しい。

また、有毒躑躅によるヒトの刺傷事例は非致死のとあったが、イヌでは致死するという（p. 45, 195）。臨床獣医学や医動物学的（浅川, 2020）に大切な記述であるが簡易過ぎる。さらに、「体毛にすみ着く寄生虫」とIgEとの進化学的關係について論じた箇所であるが（p. 72）、この免疫グロブリン分画に関わる寄生虫は一般に内部寄生虫（蠕虫）で、外部寄生虫（ダニ・シラミなど）ではない。大変興味深い論考ではあるが、改訂増補版では再検討をしたアイデアを期待する。

(文責 浅川)

## 引用文献

- 浅川満彦. 2020. 感染症制御における野生動物医学—新たな衛生動物を標的にした視点. *衛生動物* 71: 171-178.
- 浅川満彦, 本川雅治, 星野弘方. 2009. チベット産野生小哺乳類の現地踏査概況—科研最終年度に向けての備忘録として. *野生動物医学会ニュースレター Zoo and Wildlife News* (28): 20-22.